

宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌

並びに庫裡落成慶讃法要 勤修

去る五月十五日、晴天に恵まれ、大遠忌記念事業のメインイベントである法要が勤まりました。

十一時より参拝者と一緒に正信偈を唱和し、劇団音芽のみなさんによるミュージカル「正信」を観劇。親鸞聖人の姿を身近に感じていただけたのではないかと思います。

昼食休憩をはさんで午後は和鳴会による舞楽「萬歳楽」の披露から。雅楽の調べにのせた舞いを間近に見て、伝統文化に触れていただきました。

法要は真宗興正派御門主ご親修のもと、仮殿での勤行から始まり、稚児とともに寺院周辺を賑々しく練り歩きました。庭儀では三奉請により散華、本堂では住職によってこの法要の意義をあらわした表白文が奏上され、「文類」（親鸞聖人が著された『浄土文類聚鈔』の一節で「正信偈」とほぼ同内容）を勤めながら再び稚児とともに縁儀、散華し聖人を敬慕しつつ、真宗のみ教えをいただいた慶びあらたにお念仏申しました。

これまで以上にご縁が深まり、お念仏の輪が広がりますことを念じ、ここにご報告いたします。

合掌



(当山周辺を行列)



(庭儀)



(住職表白)



(内陣の様子)

阿弥陀如来はいつ如何なる時も、悩み苦しむ私たちを救おうと大悲の誓願を成就し浄土を建立して、往生の正因である信心を恵むべく名号「南無阿弥陀仏」を届けてくださいました。

その「南無阿弥陀仏」を受け取られた宗祖親鸞聖人、聖人が生きられたのは戦乱、疫病、飢饉の絶えない厳しい時代、その中でお念仏によつて、

「阿弥陀仏の御名をきき、歓喜讃仰せしむれば、功德の宝を具足して、一念大利無上なり」(『讚阿弥陀仏和讃』)

と、誰もが等しく救われる本願力回向の教法を喜び、人々に伝えられ、御同朋と共に浄土往生の道を歩まれました。

翻つて、今日を思うと、物質的には豊かといえども、大切なものを見失い迷っているように思います。また、未曾有の東日本大震災によつて傷つき、悲しむ人々もおられます。この混迷の時代の今こそ、聖人の歩まれた浄土往生の道を訪ね、いのちの真実、無量の光に照らされ、無量の寿に支えられていることに目覚めなければ、暗闇の中でさらに苦しみを深めることとなることでしょう。

宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌を迎え、いま一度聖人に学び、智慧と慈悲のお念仏「南無阿弥陀仏」を心に入れて、御同朋と手を取り合い悲苦に寄り添い、俱会一処のよろこびを共いたしましょう。

合掌



(稚児と縁儀)



(真宗興正派門主)



(住職挨拶)



ミュージカル「正信」 出演…劇団音芽



四国新聞で小説『親鸞』が連載されていますが、このミュージカルでも妻・恵信尼との生活、素朴な田舎の人々との触れ合いの中で念仏のみ教えを説く人間親鸞の姿が伝わってきました。



「時は建久、武士の力が強まり、民衆は絶えず起こる合戦で住む場所を追われ、生きる糧も満足に得られず、力のないものは次々と倒れていく有様であった。そんな世の無常を知った「範宴」（後の親鸞）は、

自力の修行の限界を感じて叡山を下り、法然上人と出会う。「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」この言葉を聞き上人を師として仰ぎ共に念仏の道を歩む。しかし、念仏の声が高まるほどに弾圧を受け、ついに承元

元年、流罪となる。師と離れ離れになり、辺境の地での厳しい生活が善信（親鸞）を待つ。しかし、すぐに素朴な田舎の人々との触れ合いに、暖かい仏縁を感じるようになる。そんな中で出会った恵信尼との結婚、幾人かの子供をもうける。——そして、流罪より五年。ようやく許される日がやってくる…」

舞楽「萬歳楽」

まんざいらく

出演…和鳴会

わみようかい



姿を象って作ったといわれます。舞い始めはゆるやかな手振りです。頭上高く両手をかざし、開くさまは、あたかも鳥が翼を広げたような晴れやかさがあります。衣装は重ね装束という名の通り、着物や袴を幾重にも重ねて着ており、相当な重さがあります。

この曲は隋の煬帝の作曲といわれ、皇帝の長久を願うお祝いの曲です。即位の礼に舞われることでも有名です。中国では名君が治められるときには、鳳凰が現れて、賢王万歳と鳴くといわれ、曲はその泣き声を写し、舞は鳳凰の舞う